現代版
「余は如何にして基督信徒となりし乎」

居石俊哉

まえがき

はじめまして、居石俊哉と申します。

私はごくごく一般的な、と言えば語弊がありますが、
キリスト教を信じていない家庭に生まれ育ち、
幼稚園から大学に至るまで、無宗教を貫き通してきたような者です。

ただ、本家の方が大きく古い家なので、
伝統とか格式というものにこだわっていて、
また神仏に対する信仰心も普通の人たちよりも篤かったように思われます。

それだから、外来宗教、特にキリスト教に対する嫌悪感と憎悪心は、
無意識的に幼い私の心に植え付けられていて、
実は信仰を持つ以前の私は、宗教、特にキリスト教が大嫌いでした。

そんな私も、信仰を持つようになって、ちょうど2年になります。
きっかけは、大学時代の人生最大の失敗でした。
そこで主を覚え、教会に通うようになり、本物の神を信じました。

今から皆さんに、私の証を分かち合いたく思います。

恵まれた幼少時代

私は非常に「恵まれた家系」に生まれ育ったと思います。
高祖父は法学者であり、曾祖父は県会議員をしておりました。
祖父以降の代になると、学校の教員になりましたが、それでも所謂「インテリ」の家系であり、
私自身も幼い頃から習い事やスポーツ、勉学に励むことができました。

私の故郷は人口12万人程度の田舎であり、大学進学率も低い土地なのですが、
私は「大学に行って、大成することは当然だ」と吹き込まれていて、信じていましたから、
特に何も考えずに学区最難関の高校に進学し、大学にもなんとか進学することができました。

私は大学入学まで、すなわち18歳になるまで、
「キリスト者」というものに出会ったことがありませんでした。
それ以前に、聖書は読んだことこそあったのですが、当時の私にとって、聖書は
「非常に甘えたことを言う本だ」と決めてかかっていたため、
キリスト教関連のすべてを忌み嫌っていました。

しかし、大学入学直後の私は、先の目標も生きていくための使命も自覚せずにいたため、
得意でも好きでもない数学や物理を学ぶことに苦痛を覚えていましたし、
それ以前に、遊ぶ元気さえ奪われていましたから、家でも大学でもずっと寝てばかりいました。
その結果、大学では単位の1/3程を落とし、
今まで優等生で通ってきた私は、神経衰弱状態になり、いよいよ廃人のようになってしまいました。

迷走期

私は、「何もしない、何もできない」自分のことが嫌いですし、今でも受け入れることをしません。
しかし、その根拠は昔と今では大分違います。

以前の私は非常にプライドが高かったため、人に揶揄されることをひどく嫌っていました。
「あいつは病気なんだ」とか、「怠けている」とか、「脳足りんだから」と、
実際には言われてもいないことを恐れていて、
その恐れによって、何事にも努力を欠かすことができませんでした。
しかし今では、「1タラントのしもべ」として生きることを嫌うために、
「何もしない、何もできない」ままでいることを望まないのです。

とにかく、私は私自身を、あるがままの姿で認めることをしなかったため、
本当に無理をして、短期語学留学のために、オーストラリアへ行かせていただきました。
「海外へ行って、見聞を広めることで、何かが変わるかもしれない」
と、何の根拠もなく信じていたからです。

確かに今思うと、47万円をかけて、オーストラリアへ「高飛び」した価値はあったと思います。
ひどく内向的な私でさえ、同い年の現地の友達、外国人留学生と親しくなり、
生まれて初めての彼女もできました。
道に迷った時には、親切に目的地まで連れて行ってくれたカップルがいたり、
よくバスや電車が遅れるのですが、それでも怒らないオーストラリア人の寛大さ（といい加減さ？）、
逆に人種差別を受けることで、私は改めて「アジア人」としての自覚を持つようになりました。
しかし、それはかりそめの出来事であって、実際には私の現状は一つも変えられておらず、
日本に戻ってきて3ヶ月後には、以前よりもひどいうつ状態になってしまいました。

彼女とも音信不通になり、もう何もかもが嫌になって、1日中ネットサーフィンをしていました。
講義に出ても、じっと座って聞くことができないし、
それ以前の問題として、体が重くて教室に行けませんでした。

ただ、親を悲しませたくなかったために、学校に行っているふりをしていたのです。
そして、そうやって欺き続けることにも嫌気がしていました。

そういうつまんない生き方をしていたので、私は何度か死を考えました。
駅のホームから列車に飛び込もうとしたこともありましたが、
勇気がなくて、それさえもできませんでした。
情けない気持ちでいっぱいになったことを、今でも覚えています。

今まで見下してきた友達が、もう現場で働いていました。
自分よりもできないと思っていた人が、優秀な成績を収めていきました。
簡単に立場は逆転し、いつの間にか、私は取り残されていました。
こうして、本当に自分自身をさげすむようになりました。

ある雨の日に、いつものように大学の図書館でネットサーフィンをしていたところ、
私は疲れてしまって、パソコンの前で眠り込んでしまいました。
その時に夢を見ました。
夢の内容ははっきりと覚えていませんが、とにかく「回復への道」を探し出すんだ、
という内容だったように思います。
それで、起きて「うつから脱出するために」再びネットサーフィンを始めました。

そのときに、私は偶然にもクリスチャンの証のページを見つけることができました。
その文章を読み終わった後、何故か「教会にでも行ってみるか...」という気持ちになり、
早速、大学近くの教会を探してみました。
「こんな田舎にも、教会はたくさんあるもんだなぁ」と感心しながら、
アポなしで教会に行きました（今考えると、とても失礼な行為だったと思います）。

事務の方によって、初めて教会堂に迎え入れられたとき、
そこはバプテストの教会だったのですが、
目の前には本棚以外の何もないのに、当然人がいるわけでもありません、
ただ、それなのに、心の底から、今まで閉ざしてきた感情のすべてが噴き出して混乱しました。

涙があふれて止まりませんでした。
それと同時に、「泣く」とか、「笑う」ということを忘れていたことに気づきました。
ただただ、私もひとりの人間だったことを思い出していました。

その日はしばらくして、教会の牧師と話しました。
その後に、教会の牧師夫人が、「礼拝にも来てみませんか」と言われたので、
「とりあえず行ってみよう」と思いました。
一冊の本を紹介されて、さっそく駅中の本屋で買い、列車の中で読みながら帰りました。
聖書は家にあったので、久しぶりに読んでみることにしました。
以前にはなかった感動が、そこにはありました。

私の両親も祖父母も立派な人で、法を犯した人は誰もおらず、
学のなかった者も誰ひとりとしていませんでした。
地域の人は私たちをある意味、信仰していたように思います。
私たち親族もまた、私を除いて
「人前に正しい生き方を心がけていて、実際に恥ずかしくない生き方をしている」と言い、
少なくとも「私たちは罪人ではない」と信じていました。

しかし、私は全くそうは思えませんでした。

特に私は、与えられたものが非常に多くありながら、
それらに気づくことさえせず、生かすことにもことごとく失敗しました。
また、養ってもらっている身分でありながら、心の底では両親を馬鹿にしていました。
決して自分の非を認めず、他を悪く言うような、
そのくせ自分を卑下しているような、最低な人間でした。

これでは、聖書に出てくる「1タラントのしもべ」と、何の違いがあるというのでしょうか。

それから私は、聖書を読む姿勢が変わってきた気がします。
以前は「知識を蓄えるため」に読んでいたのですが、
このことに気づいて以降は、「神の訓戒に聞き従うため」、
すなわち、「義の道と罪ある現実を悟るため」に、聖書を読むようになっていきました。

すべてを「あるがまま」に受けいれるように、努めるようになりました。
しかし、罪ある状態にとどまっていてはいけないとも思っています。

私たちの存在自体が、主の目には「高価で貴い、愛すべきもの」でありながら、
私たちの行いについては、主の目には「正しくない」ことだらけなのです。

ですから、私たちは「行いによって」義と認められるのではなく、
主イエスへの信仰によって、その存在を義として認められるのだと思っています。

ただ、少し考えていただきたいことがあります。

私たちは、望む善をおこなうことができず、望まない悪を行っている現実があります。
その私たちの罪のために、イエスさまはその咎を負い、十字架で死なれました。

私たちは、イエスさまにとって「いのちをかけてまで愛すべき存在」であったわけです。
そのように認められている私たちが、果たして主イエスの十字架を踏みにじり、
今まで以上の悪を行うことが許されるでしょうか。
逆に、そうでなくとも、私たちが十字架の贖いから離れて行き、
「自分の力で」きよめを実現しようとすることが許されるでしょうか。

信仰によらない行いは、すべて罪であります。
私たちはその「罪ある状態」に、とどまり続けることは許されないはずです。

ですから私たちは、日々聖霊によって導かれ、
きよめられていくことを望むべきだと思います。

富むときも、貧しいときも、健康なときも、病めるときも。
生きているときも、死に渡されるときも。

すべては主の御手のうちにあることを覚えて生きたいと思います。

あとがき

ユダヤの格言の一つに、このようなものがあります。

「神は物語　がとても　好きだから人間を創った。　　」

私の証はこの通りですが、人にはそれぞれ違った物語があります。

ですから、救いの証とは、必ず「こうでなければならない」という形式はなく、
また、一人ひとり違った証があるからこそ、面白いものなのです。

ただ、救われること以上に大切なのは、救われた後の歩みであると私は考えます。

よく、「結婚は人生の墓場だ」と言われています。
それは、結婚式を挙げた時点で「ふたりはゴールインした」と考えるからではないでしょうか。

結婚が恋愛のゴールでないのと同じように、洗礼式が人生のゴールではありません。
救われた後、如何にして神と共に歩むかが、私たちクリスチャンの課題であり、
一つの物語を作っていくものであると考えています。

これからの人生を、楽しみに生きようと思います。